『就実教育実践研究』第14巻　抜刷
就実教育実践研究センター　2021年３月31日　発行

V.シナソン『知的障害のある人への精神分析的アプローチ』をめぐる対話のはじまり

How can we open dialogues with "Mental handicap and the human condition" by V. Sinason?

山田美穂・櫻井未央・中島由宇

V.シナソン『知的障害のある人への精神分析的アプローチ』をめぐる対話のはじまり

山田美穂（教育心理学科），櫻井未央（杏林大学），中島由宇（東海大学）

How can we open dialogues with "Mental handicap and the human condition" by V. Sinason?

Miho YAMADA（Department of Educational Psychology），
Mio SAKURAI（Kyorin University），and
Yu NAKASHIMA（Tokai University）

抄録

『知的障害のある人への精神分析的アプローチ』（2021年夏出版予定）の翻訳にあたった訳者らが、原著者であるイギリス人女性精神分析家ヴァレリー・シナソンの実践を１事例ずつ紹介し、それぞれの研究テーマや問題意識に引き付けながら考察した。中島はシナソンの実践の特徴を強さと純度と捉えた上でこの書の意義を検討した。櫻井はシナソンの「ことば」がセラピーの中でどのように機能したのかという観点からシナソンの臨床実践に接近し、山田はシナソンとクライエントの間の「ことばのないところ」に着目した。

キーワード

知的障害，心理療法，精神分析，ことば，Human Condition

Ⅰ　はじめに

1　原著と著者の紹介

本論文は、ヴァレリー・シナソン Valerie Sinason著『Mental Handicap and the Human Condition: An Analytic Approach to Intellectual Disability』の翻訳に取り組んだ訳者３人による論考である。シナソンはイギリスの女性精神分析家であり、知的障害の心理療法の第一人者である。クライン派の理論と技法を基盤とした治療・教育機関であるタビストック・クリニック等において長年臨床と教育に携わった後、独立して解離研究クリニックthe Clinic for Dissociative Studiesを立ち上げた。翻訳作業は本論文の筆者ら３人と放送大学・倉光修教授（監訳）および倉光星燈氏（訳）の計５人が分担した。邦題『知的障害のある人への精神分析的アプローチ』（仮）として2021年夏頃にミネルヴァ書房から出版予定である。

原著は２部構成である。第１部「背景」は３章で構成され、知的障害をめぐる歴史や用

語の変遷を整理しながらシナソン自身の理論的・臨床的立場を示している。第２部「事例研究」は12章で構成されている。アルツハイマー型認知症の事例、知的障害のある成人・子どものグループセラピーのヴィネット、デンマークの知的障害者グループホームでのセンセーショナルな出来事など、幅広い「知的ハンディキャップ mental handicap 」の事例が取り上げられているが、その中心は、シナソン自身が担当した個別事例の詳細な記述と徹底した考察である。第１部・第２部共に高い資料的価値があるが、日英の歴史的・社会的背景の違いやページ数との兼ね合いなどを考慮し、翻訳版では第１部を割愛している。

近年になって、知的障害のある人たちが様々な心理的問題を呈しやすいことは広く認識されるようになっている。しかし、知的障害を対象とした心理療法の実践や研究は、質量ともに非常に乏しいままである。彼らに心理療法は無理だろうという、社会の側の、そして臨床家の側の先入観は根深く存在する。そのような中で本書は、重度・最重度の知的障害のある人への本格的な精神分析的アプローチの実際をきめ細かく描き出した初めての書である。そしてそれだけではなく、器質的・先天的要因による「一次障害」と環境的・後天的要因による「二次障害」という、従来の単純すぎる二分法を超えて、知的障害のある人たちが虐待などによって受けるトラウマが、情緒的・認知的・社会的にいかに複雑な影響をもたらすか、セラピーによってその影響が変化することによって隠された知性がいかに鮮やかに出現し得るかをはっきりと示した書である。

２　本稿執筆の経緯と目的

筆者らは2020年の日本心理臨床学会で、本書の紹介と知的障害の心理療法をテーマとした自主シンポジウムを企画していた。しかし、新型コロナウイルスの影響のため自主シンポジウムは中止となり、次年度以降の機会を待つことになった。そこで今年度は別の形での発表ができないかと模索し、たどり着いたのが本稿の執筆であった。筆者らはシナソンとの直接の交流はないが、それぞれが翻訳作業を通して事例と共鳴し、咀嚼し、格闘し、対話したという手ごたえを持っている。つまり本稿には、シナソンあるいは彼女の著書の書評という側面と、筆者ら自身の臨床実践を通した考察という側面とがある。

以下、３人がそれぞれシナソンの事例研究の中で特に印象深いと感じた部分に焦点を当て、事例との対話を深めることを試みる。Ⅱでは中島が原著第６章「ハンディキャップ・スマイル―トラウマに対するアリの防衛」、Ⅲでは櫻井が第７章「代書者機能と子どもの発達―トマスの事例」、Ⅳでは山田が第９章「ことばのないところに意味を見出すこと―自傷と最重度障害」を取り上げる。特に統一したテーマ等を設けず、各自の臨床的関心に引き付けて考察したものであるが、３つがバラバラになるのではなく、本稿全体がゆるやかなポリフォニーとして成立することを意図した。そのため、メール会議、Zoomミーティング、そして原稿を読み合うことを通して、対話を重ねながら執筆を進めるという方法をとった。

Ⅱ　この書からまず受けとるべきもの

1　シナソンの強さと純度

ここに取りあげる第６章は、この書の中核をなす章のひとつであり、アリという少年とのプレイセラピーが記述されている。ここで論じられたハンディキャップ・スマイル handicapped smile とは、障害やトラウマの痛みを否認して幸せを擬態する防衛的な笑顔のことを指す。シナソンが提唱した中でも最も重要な概念であって、知的障害のある人の心について考える上で欠かすことのできない用語である。そして、この章で捉えている痛みとは、私たちがこれまで十分しっかりとまなざしを向けてこなかった、知的障害のある人への性的虐待である。

アリは、陽気で誰彼構わず近づいていくような、８歳の知的障害のある少年であった。おそらくイスラム系移民で、両親もまた軽い障害をもち、経済的な問題も抱えていた（こうした背景があるアリがサイコセラピーに出会えたのは僥倖であり、イギリスの医療制度によるところであろう）。アリとシナソンのやりとりは当初、わかりにくく、断片的でとりとめもないものだった。それに劇的な変化が起こったのは、セラピーが始まって１年後、ピエロの人形などの新しい人形をセラピールームに導入した、セッション42だった。以下に、セッション42の記述を抜粋し、そこでのアリとシナソンの相互作用をたどる。

アリは人形を見た。ピエロの人形を見て、それから私を見た。そのピエロの人形は、片面の顔では満面の笑みを浮かべていたが、ひっくり返すと泣き顔があった。アリはこの表情の違いを注意深く調べた。アリの満面の笑顔はなくなり、驚くほど悲しい顔を見せたが、間もなくいつもの満面の笑みが戻った。このとき、私は初めてそれが本当の笑顔ではないということを知った。その瞬間に、障害がある患者たちのこの表情を、何年もの間いかに自分が読み違えていたかを理解した。アリは私の顔に浮かんだ衝撃の表情に明らかに気づいていた、というのも、彼はこう言ったのだ。「うん。僕、悲しい I sad。僕は悲しい顔のアリだよ。ピエロは悲しい顔ができるんだ」。すでにこの数文の中にみられる言語的変化は、彼の情緒的な変化に相当していた。いつもの二語文―「僕、悲しい I sad」―から、主語と動詞と形容詞のある文法的に正しい文へと移行していた。

ピエロの２つの表情をまじまじと見た後に、アリが浮かべた驚くほどの悲しみの表情をシナソンが捉え、知的障害のある人の笑顔の裏の悲しみをはじめて深く悟り、雷に打たれたかのような衝撃を受けるという、劇的な瞬間がありありと描き出される。ハンディキャップ・スマイルをシナソンが初めて捉えた瞬間である。そして、その稲光が刹那に空をつたうかのようにアリへと伝わり、アリの扉が開かれるかのようにことばがあらわされる。

その後、「偽りの」笑顔を浮かべてアリは「もうだいじょうぶ」「みんな、だいじょうぶ」と言う。そのことばは、裏腹に本当は大丈夫ではないことを伝えるメッセージとしてシナソンに受けとめられる。その矢先にアリは言う。

「見て、お人形さん！やあみんな！ファックしたい？」

しかしアリは、*「僕は先生に言っているんじゃないよ、シナソン先生」*と怯えたように

付け加える。本当にシナソンは自分の伝えることを受けとめられるのか、それに耐えられるのか、アリは恐れ、逡巡している。実際シナソンは、セッション中に性的虐待について示唆されるというシナソンにとって初めての事態に耐えられず、吐き気がして（sick）、アリの示すものを飲み込み受けいれることができない。シナソンはそれをごまかさずにつまびらかに文章にする。

＜あなたが何をしているかはわかるけれど、あなたのペニスはあなたのプライベートなものよ＞と言った。明らかにそうではなかったのに。彼は私にそれを伝えていたのに、そのときの私は彼が差し出している認識に耐えられなかった。私は愚かになったまさにその人だった。

セラピストがクライエントの痛みを直視できないとき、セラピストは「愚か」になり、つまりハンディキャップを被る。シナソンの用いる「ハンディキャップ」という語は、単に機能的な障害や機能障害をもつ人の社会的不利に留まらない広範で多様な意味を備えており、機能障害のある人と関わる他者においてこのように生起する障害、思わず目を覆って見ないようにする、「愚か」になる心の動きをも指す。ここでアリが諦め、再び表面的なハンディキャップ・スマイルを浮かべる、ということも起こりえた瞬間であった。しかし、アリはそうしなかった。

幸いにも、アリはそれに続けることができた。「ペニス？それは僕のことばじゃない。僕のことばを知ってる？僕のことばでは、『fuck（ファック）』のことを『sick（病気）』って言うの。それで僕は今『病気』になろうとしてるんだ」。

sick は fuck（ファック・性交）をカモフラージュする隠語としてアリの周辺で用いられていた。シナソンの感じた吐き気 sick はアリの示す性交 fuck をめぐる体験の逆転移としてシナソンに捉えられ、アリが性交 fuck をめぐる体験により病んで sick、苦しんでいることがシナソンに理解された。このように、「愚か」になったシナソンの知性は早くも回復していく。シナソンは、何かによってアリが病気（性交）になったことを指摘し、アリが愚かになって悪いことをわからないようにしていることも指摘する。シナソンは早くも自らを立て直し直截な言語化に至る。それでも、アリが性的に興奮してその欲望を直接シナソンに向けてくることについては扱うことができないでいる自分自身をシナソンは捉える。

私は、アリが実際に言ったりしたりしたことを通してというより、自分自身の臆病さを通して、愚かさとトラウマの関連について理解しつつあった。

シナソンは、受けとめがたく臆病な自身を通して、トラウマに対して愚かになるという防衛としてのハンディキャップ・スマイルについて理解していこうとする。

その後アリは、セラピールームの新しい人形にファックする。セッション43以降のセッションでも、アリはセラピーの中で性的虐待を赤裸々に痛ましく表現し、時には発作的にはさみをとって自分の耳を切り落としたくなるほどの（聞かないようにしたくなるような）恐怖に襲われながらも、思い出す苦しみと格闘していく。シナソンはチームのサポートを受けながらそうしたアリに向き合い続ける。アリは知性を回復させていき（知的障害が治

癒したという意味ではない)、怒りを表現しうるようになっていく。まぶしく、飛躍的な成長である。しかし、最も弱き立場に置かれ、前の世代からの負の歴史を無理矢理に継承させられてきた（アリの年の離れた異母兄がわずか４歳の時に村の男に集団強姦され、家族はイギリスへ移住を余儀なくされたことが両親により明らかにされた）アリは、いくら飛躍的な成長をとげてもなお、苛酷な現実の中に置かれ続けることには変わらず、より強い者からなおも虐げられ続ける。ついにセラピーの継続自体が、外的な要因によって困難になる。シナソンが伝える、*＜たとえあなたがもっと大きくなっても、いつだって、もっと強い人はいるでしょう。でも、たとえ止めることができなくても、やめてと言うことが大切なの＞*ということばは、そしてそれを自ら体現してセラピーの継続のために最後まで外部に働きかけて奮闘するシナソンの姿は、アリに確かに捉えられ、アリは*「僕は戦うよ。僕にはセラピーが必要だって言うんだ」*と力強く述べる。けれども、アリが虐待する側に転じてしまうかもしれない、ハンディキャップ・スマイルという防衛に再び舞い戻るかもしれない、という不安を苦く残したまま、セラピーは終結（中断）に至る。

セラピーの後も続く茨の道を思えば、そっとしておいて、偽りのスマイルに閉じこもって見ないようにしたまま生きていけるほうがアリにとってはいっそ幸せであったのでは、といった考えは、おそらくシナソンに言わせれば虐待への共謀と加担に他ならない。このセラピーを評価的に捉える資格があるのは唯一アリだけである。アリのセラピーには揺るぎない価値と意義があり、その展開の出発点となったのがセッション42である。

セッション42の、シナソンの力強さと純度はどうだろう。シナソンはアリの一瞬の表情から、これまで知的障害のある人の笑顔の向こう側を見ようとしてこなかった自分を覚知した。そのシナソンの覚知に呼応して開かれたアリの表現をつぶさに捉えて、揺さぶられながら自己覚知を重ねていった。めくるめく相互作用の中で、アリと自らをまっすぐに細やかにみつめようとし、あるいは思わず目を覆いたくなった自分の心の所作を捉えようとした。このセッションでシナソンは、アリとの関わりの中での自らのハンディキャップを鋭敏に捉え続け、それを可能にするほどの強靱さを備えていて、それがセッション42の劇的な展開を生じさせる源となっている。

２　シナソンがなしたこと

この書におけるシナソンは、セラピーにおいて間違いなくほとんど全存在でセラピーの関係の只中にいる人である。その場で見聞きし感じとられたことのほとんどすべてが、セラピーの理解のための素材となり内省の対象となる。とりわけ、その只中でセラピストに生じる逆転移をごまかさずに直視しようとする。そのように扱えるだけのタフネスがある。ゆえに、セラピーから析出された事例の記述には、安易な相対化から免れるだけの確からしい強度と説得力がある。しかと捉えることがただでさえ難しい知的障害のある人の心、中でもとくにデリケートで見出しにくい性的虐待の問題についてセラピーで取り組んだ第一人者には、こうした強さと純度がなくてはならなかった。

シナソンは、虐待を発見するためには虐待の可能性を念頭におき続ける意志をもつことが重要であると指摘している。しかし、虐待の可能性を考慮し続けることがいかに困難であるかということについては、シナソン自身、アリへの虐待について「そう考えるのは正気ではない」と感じていたと明らかにしており、特に医学的な証拠や客観的な証言のないところではその考慮の維持は困難をきわめる（アリについても、かつて異母兄とアリが留守番をした際にアリが不可解な事故にあったことと、学友からのトイレでのいじめについてアリが司法面接で述べたことの他に、虐待の客観的な根拠は見出されなかった）。

そう、セラピストの心はざわめくものだ。これは私の過剰な思い込み（妄想）ではないか、一人勝手な投影ではないか、家族や周囲の人はこの推測にどのように反応するだろうか、踏み込むべきではないのではないか、クライエント自身は一体何を望んでいるというのか。時に、こうしたざわめきこそが聞きとるべき真実を伝える声であるかのように感じられることもある。しかし、このざわめきとは往々にして、クライエントとの関係性を起点とするよりも、セラピスト自身の問題やセラピストと社会との関係から沸き起こってくるもののように思う。

なので、セラピールームに入るときには、この心のざわめきはいったん脇に置いていかなくてはならない。シナソンはそうすることのできた人であろう。セラピーにおいて目の前のクライエントとの関わりの只中でのことにひたむきになり、そこで生起することに全身で注力して感受し、内省する。そのようにして、全存在で関わるのでなければ決して到達し得ないであろう理解を得る。

ひたすらひたむきであるのはセラピールームの中でのことであって、セラピールームの外では、さまざまな可能性を踏まえて広く開かれた対話や議論がなされることも必要である。しかし、そこにおいても、セラピストにおいてセラピールームの中で把握した事実の確からしさへの信は保持されなければならない。なぜなら、知的障害のある人がセラピールームの中で一回的に示したものの確からしさを保証できるのはその場に居合わせたセラピストしかいないからだ。シナソンはその信を置き続け、その責任を全うした。そして、この書でその実践を世に知らしめた。

ベッテルハイムなどの例を思い起こすまでもなく、このような、ひたむきで純粋で力強く、ゆえに時に過剰になったり重篤なリスクをはらんだりする実践とは、その逸脱性が見て取りやすく、いとも容易に第三者からの批判にさらされるものだ。この書で取りあげられた事例の転帰は良好とは言いがたく、それは知的障害のある人の抱える困難の重篤さを厳しく示すものだが、その転帰をもとに客観的な視点からこの実践を批判することはたやすいだろう。また、目の前のクライエントの呈する事実性を純粋に受けとめるがゆえに、実践者の理解がコモンセンスとの齟齬を起こし、十分な社会的合意を得られにくいこともあるだろう。特にこの書で取りあげられているファシリテーテッド・コミュニケーションや儀式虐待 ritual abuse はその真偽についてすら意見の分かれるところである。さらには、この書においてその限りではないが、こうした力強さがかたくなさに変わり、教条化して

しまう可能性もあるだろう。心理臨床の臨界点においてチャレンジされるこうしたパイオニアの実践とは、ひたむきで力強い側面とは裏腹なもろさと危うさをもち、そして当の実践者はおそらくひどく孤独なものである。

しかし、こうした実践でしか切り開けない地平はある。シナソンが開拓した、知的障害のある人の心の痛みへの理解に向かうはじめの一歩によって、私たちはその道に立つことが初めて可能になった。それこそがこの書でシナソンが示したことであり、私たちがこの書から真っ先に受けとるべき恩恵である。

（中島由宇）

Ⅲ　セラピーのなかに置かれることば

1　障害と対峙するとき

障害のある人と心理臨床の場で出会ったり、障害にまつわる問題を取り扱ったりするときには、何とも心もとない思いがするものである。知的障害のある人に心理療法のニーズがあることは明らかに感じられ、それを話題にすることが憚られるわけではないが、正面切って語ることには難しさが伴う。ともすれば夏の某チャリティ番組のように障害に打ち克つ“美しい物語”を押し付けるようになってしまうし、かといってその困難さのみに焦点を当てるのも辛く冷酷に感じられるかもしれない。いずれにせよ障害の問題は、人がそれに対してどう「構え」、布置するのか、という問題をつまびらかにする。そしてその「構え」を曖昧にしたまま論ずると、社会に流通する規範的な語りであるマスターナラティブ[7)]に回収されてしまい、障害のある人たちの小さな声の物語は花開くことはない。そういったマスターナラティブに囚われてしまうことは何も当事者やその周辺にのみ当てはまるのではなく、客観的にその事態をとらえているはずの研究者ですらそこに足元をすくわれる[8)]。シナソンの臨床実践には、そのような囚われや不自由さが見えない。そこにあるのは、原著タイトルに示される「ハンディキャップと人としてあること handicap and human condition」について、篤実に、そしてセンシティブに捉えようとしている姿勢のみである。

2　シナソンはどのように障害のある人と対峙しているのか

筆者がシナソンのそれを最も感じるのは「代書者機能と子どもの発達」と題された第7章である。この章はトマスという重度の知的障害のある14歳の少年とのセラピーを核にしており、ここでシナソンは「書くこと」の意味を問う。代書者機能 scribe function とはトマスがセッションの中でシナソンを書き手として器官のように用いたことを表している。トマスのことばを代書する瞬間、シナソンはトマスについて考えることを許されない対象となり、そこに残るのはノートに記された文字のみであった。そして文字がそこに残ることはコンテイナーとしても機能していたが、視覚的にも共有し得る形態をもった文字の生々しさはトマスに痛みももたらし、ケースは40セッションで中断となる。その危険をシナソンは予感していただろうが、それでもそこにとどまり続け、ほぼ毎回のセッションでトマスの発することばをとらえ、書き続けた。ここでは、「書くこと」に至ったセッショ

ン１から、シナソンがどのようにトマスと対峙しているか、そしてその際にことばがどのように機能しているか、提示してみたい。

トマスは、軽度の障害のある父と精神的に病んだ母のもとに生まれ、地域の支援の目に留まることもなく４～５歳まで過ごしていた。彼は普通であることの喪失だけでなく、家族や生育歴の喪失という「知的障害の世界ではおなじみの惨状」を経験していた。リファー当時、施設で暮らしていたトマスは、椅子を投げつけるといった暴力行為がやまず、施設内でも10分以上落ち着いて過ごすことができない状態であった。

トマスの担当職員同席での初めてのセッションで、セラピーが依頼された理由となった暴力について説明されるとトマスは愚かなスマイル stupid smile で呼応する。シナソンはその偽りの笑顔の奥に恐れをみつけ、それを以下のようにことばにする。

トマスは自分のしたことがどれほど暴力的だったか、そしてこれからもどれほどそうなり得るかをとても怖がっているようだと伝えた。そして＜いまのことばでまた怖く感じているみたいね＞とも伝え、＜暴力のせいで私たちがあなたに腹を立てることも怖がっているのかもしれない＞と付け加えた。トマスはうなずき、おもちゃの置いてあるテーブルへと戻った。座った時でさえ、身体の一部は動作を続けていた。

シナソンは観察された事象や自身の連想をありのままことばで記述し、まるで“わたしが差し出せるのはことばなのだ”と伝えているようにも感じられる。泣いている乳児に対面した母親が「オムツかもしれない」「ミルクかもしれない」と心を砕いているかのようにも思える。初対面の14歳の少年にこれほど実直にことばにすることが可能だろうか。しかし何の衒いもないシナソンのことばは、トマスにしっかりと染み込んでいくかのようである。その後部屋のおもちゃは自由に触れていいのだと伝えられ、トマスはワニの人形に小さい少年の人形の足を噛ませ、幼いころの虐待の事実を再演する。

＜ワニのお父さんが男の子の脚を傷つけている＞。彼はうなずき、そして自分のズボンをはいた脚を指さした。「傷」。私は彼の脚を見たいと思っている自分に気づいた。私は＜男の子の脚が傷つけられたのと同じように、自分の脚が傷つけられたことを私に知ってほしいのね＞と言った。彼はうなずいた。そして彼は愚かなスマイルを見せた。私は＜ズボンが傷を隠してくれるのと同じように、傷ついたときにそれを隠すためにあなたは笑うのね。でもあなたはことばで伝えることができるし、人形を使って示すこともできるの＞と言った。

トマスはこれらのことばに怯え、「帰る」と立ち上がる。普段なら暴力行動として表現していたかもしれないことを「帰る」と言って伝えてくれたことだけでも、ことばが役に立つ世界の一端にトマスも居始めているようにも感じられるが、しかしだからこそシナソンは、その事態についてさらにことばにし、ふたりの間に置く。

＜脚が傷つけられたことをさっき私に教えてしまったから、怯えているのね＞とも言った。私に言ったことによってさらに傷つくと感じたのかもしれない。私は＜あなたが小さくて家にいた頃、お父さんはあなたを傷つけたのかしら＞とも、声に出して言った。

このことばを聞き、トマスは「書いて」とシナソンを代書者とし始める。しかし、単語で伝えた彼のことばをシナソンが文章にして書くという行為も、彼にとって脅威でもある。

彼はペンを私の手にまた押し付け、そして私の手首を紙の上に引っぱった。私は＜あなたは自分のことばに役に立ってほしくないのね＞と言った。彼は私に自分のことばに反応してほしいと思っていなかった。トマスは、私を行為に引き入れなければ、私は役には立たず、自分を助けようともしないのだと感じていた。彼は私の手を離した。＜私のことばが聞こえたのね＞と私は言った。

確かに彼は自分のことばが機能するはずなどないという世界に生きていたのだろう。そしてシナソンが代書した『*トマスは、初めてシナソン先生とこの部屋に一緒にいて、怖いと思っている。彼は自分の名前と彼女の名前を書いてとお願いして、それを真似して書き写す。彼はノートに彼が怖がっていると書いてとお願いする*』を読み上げてもらい、初めてリラックスした表情を見せるのである。それは普段の動きがいかに緊張したものであるかをはっきりと示し、その動きが二次的に派生したものであることも明確にする対照的な瞬間だ。しかしその安堵の時間も束の間、「帰る」とふたたび怯えた様子を見せ、15分のセッションを終えた。

3　シナソンのことばを巡って考えること

1）書くことによって抱えられること

トマスは最初の数回、自分の口から発され、シナソンによって代書された文字をなぞるように書き写していた。発されたことばはその段階では意味を持たず、音を奏でているにすぎなかったかもしれない。そして、即座になぞられるそれらの文字にも意味や思考はなかっただろう。ビオン[3)]は乳児がミルクがもらえるとどこかで予期していたが、実際にミルクをもらう経験に繋がらなかった時、そのフラストレーションを持ちこたえられるならばその時間差が思考を生むと示している。トマスは予期をすることもフラストレーションに耐えることも恐怖として感じ、思考や文字の意味が「在る」と感じることも名状なき恐怖 nameless dread と感じられたであろう。また、シナソンがそこに居ることは彼女が代書に取り組んでいるあいだは安全であり、トマスもそれを良いものとして体験できていた。しかし書き終わった瞬間、トマスは絶え間なく動き回る。シナソンはビック[2)]を引用し、このような身体活動が原初的な喪失に直面した時の「第二の皮膚」を作る試みであると示す。その後のセッションでトマスは文字をなぞることで自分のものにすることを必要としなくなった。シナソンはこの事態を、トマスがページの上にことばが分離して在ることを抱えられるようになり、それを許すことができるようになったと捉えている。

それまでのことばはトマスにとって音として発され空中を漂っているだけにすぎず、受け取られることも視覚的に存在し続けることもなかった。生育歴という歴史すら残らないという惨状もそれを物語っている。そのような彼にとって、ことばが機能し、自分の意味ある痕跡が残るということはどのようなことだったろう。シナソンという生の対象に触れ

ることが恐ろしい彼にとって、無機的な記号としてのことばという痕跡/形態によってやっと抱えられる体験が起き、分離の痛みに耐え、意味あるものとしてのことばが機能する世界に居るということに没入することもできたのかもしれない。

2）解釈としてそこに置かれることば、そして不在の意味を明確に感じること

シナソンは「書くこと」だけでなく、解釈としてのことばを伝え続ける。シナソンのことばは一つひとつが鋭利で力強く感じられる。いったい彼女のことばはなぜこんなに強さを持つのか。クライン派分析家はこれが当然と捉えるのだろうか。例えばタビストックでほぼ同時期に子どもの治療にあたったアルヴァレズ[1)]は解釈について次のように考える。抑うつポジションを経験することができるクライアントには転移や無意識についての「説明レベル」の解釈が、体験の意味そのものが生成していないか不安定であるクライエントには「記述レベル」の解釈が、さらにそもそも意味がそこに在るということに気づく必要のある段階のクライエントには心の再生と命をあたえる「強化レベル」の解釈が、注意深く使われるべきであり、それぞれどのようなかかわりが求められるかが記されている。

アルヴァレズの記述で言えば、トマスは意味が「在る」ということに耐え難い存在としてセラピーの場に現れているといえるだろう。そのトマスにシナソンは「強化レベル」の解釈をなし、トマスはそれに抱えられ、体験の意味そのものが生成し始める世界の一端に降り立ち始めていた。そこにトマスもシナソンも留まることができたら中断せずに済んだのかもしれないとも想像する。しかしトマスは抱えられたからこそ怖くなり、すぐに二次的な愚かさというトマスにとっての安寧の地に引き下がってしまう。その偽りの安寧は強固で、ブラックホールに吸い込まれるような引力で周囲も引きずり込まれる。そこに何もないと知っているのに。シナソンが鋭利にことばを提示し続けないといけない知的障害をもつという世界の厳しさが、ここに垣間見えてくる。シナソンのように対峙しないと、我々が障害の世界にのみ込まれ、「愚かに笑っているあなたと、それを微笑ましく感じるわたし」という関係性に閉じ込められ囚われてしまうということかもしれない。障害という違いに触れた時、その痛みに耐え、考えられる自分であり続けるには、その痛みに思いを馳せ、どちらも愚かさに逃げずに、それがそこに在るのだとまず抱える必要がある。

藤山[5)]は解釈について、解釈の内容も当然大事であるが、何よりもまず、患者の世界の一部に組み込まれた投影同一化の一部にされたり、患者の慣れ親しんだ反復強迫に巻き込まれたりせずに、そして例えば“支えたい”“救済したい”といった差し迫ったこちらの気持ちを持ちこたえたうえで、「自分のこころをはたらかせている人を患者の前に提示し続ける」ために、解釈を目指す重要性を説く。翻ってシナソンは、トマスの見せる愚かなスマイルといった投影に巻き込まれず、二次的な愚かさの影に隠れてひっそりとうずくまるトマスを見ていた。また、セラピーの良さを享受することが怖くなり「帰る」とこれまで何度も反復されたやり方で回避したり、力ずくで万能的にシナソンを動かそうとしたりするトマスにも、シナソンはことばは work するのだとひるまず伝え、そして、代書者とし

て形ある生々しさを、トマスがこれまで誰からも抱えてもらえなかった部分を支える文字を、提供し続けた。それがお互いにとってどれだけ痛みあることだったかしれない。形ある生々しさがそこに発現した途端、これまでにそうされなかった経験も明確な輪郭を持つようになるだろう。そこでは、暴力というかたちでトマスがエナクトしていた「悪いものがある」のではなく、自分には「良いものがない」と不在の存在を抱えなくてはいけない事態に直面せざるを得ず、それにトマスは耐えられなかった。セッションの中断に繋がる所以でもあったろうし、シナソンの実践についてはさまざまな意見がありうるだろう。しかしそこを超えて、障害という痛みやそれに直面するものが抱く罪悪感に、シナソンがもちこたえ、トマスの前でただのひとりの人としてあり続けたことには、敬服の念を禁じ得ない。障害を前に心もとなさを感じるとき、どのような投影に巻き込まれた自分がいるのか、我々は考え続けなくてはいけない。

それゆえか、シナソンは中断ケースを本として世に送り出すことにさえ躊躇はない。シナソンにとって中断は当然の帰結ではないにしろ、ただただその事実が在るということに真摯に対峙する姿を出版することでも我々にみせてくれる。そのような態度は読者がどの章を読んでも感じ取られることであろう。ぜひ翻訳書を手に取ってお読みいただきたい。

（櫻井未央）

Ⅳ　ことばのないところに意味を見出すために

1　マウリーンとシナソンの「ことばのないところ」

本節では、第９章「ことばのないところに意味を見出すこと Finding meaning without words」のマウリーンの事例を取り上げる。マウリーンは若い女性で、最重度の知的障害があり、ことばを話すことができず、使える手話も少なく、身体障害のため車いすを使っている。５歳の時に両親に捨てられ、施設で暮らしている。自分の目を突く、手や腕をえぐるという激しい自傷行為と長時間の泣き叫びにより、心理治療が求められ、シナソンに紹介されたクライエントである。

本稿Ⅱ・Ⅲでも示されているように、本書を通してシナソンが使う方法の中で最も目を引かれるのは「ことば」であるが、本節ではそれらを支える「ことば」以外の方法に注目してみたい。筆者が身体的アプローチを学んでいるため、どうしても「ことばのないところ」に惹かれるという個人的関心もあるが、マウリーンの事例でシナソンは、「ことばのないところに意味を見出すこと」のために、自分の外側と内側のあらゆるものを使ってセラピーを成立させ、継続させている。タイトルの「without words」とは、「ことばを話せないマウリーンその人」のことだけでなく、「マウリーンのことばでない何かを必死に受け止めようとするシナソンのあり方」のことでもあると思われる。

シナソンのベースはクライン派の精神分析であるが、寄って立つ理論から考えるというより、目の前のクライエントの真実のために行動するこの人の臨床実践には、「知的障害のある人に精神分析的アプローチを適用した」ということ以上の、既存の枠組みを超えていくものがあるように感じられる。実際にシナソンは自らのスタイルを「エスペラント」、

つまり様々なアプローチを合成した方法だと表現している[4)]。

そこで本節では、シナソンが使うあらゆる方法について検討する。まずマウリーンの事例で使っている「2　自分の外側のあらゆるもの」として、1）関係者との協働、2）セラピールームのおもちゃを挙げる。次にことば以外の「3　自分の内側のあらゆるもの」として、1）五感を使った観察、2）身体的共鳴、3）詩作を挙げる。そして最後に、マウリーンの事例からは離れるが、シナソンの臨床に関する他書の記述を紹介する。

2　自分の外側のあらゆるものを使う

1）関係者との協働

シナソンは、家族や施設職員とのコンサルテーションもアウトリーチも、それがクライエントに与える影響を慎重に考慮しつつ、積極的に行う。マウリーンの事例では、まずマウリーンの担当スタッフであるテレサによる紹介状の記述から、マウリーンに対するテレサの深い理解を読み取る。インテークセッションでの初対面時には、マウリーンとテレサと3人で過ごした後、マウリーンにテレサが退室しても大丈夫かを尋ねる。すぐにマウリーンの反応はなく、*「テレサが『大丈夫だと思います』と言うと、マウリーンは笑顔になった」*。このやりとりからシナソンは、*「マウリーンは、自分が話に乗るより前に、2人だけで過ごすことをテレサが嫌がらないか知りたいのだ」*と、マウリーンがすぐに反応しなかった理由を推測する。この時は20分間を2人で過ごすことができたが、次のセッション1では、マウリーンが泣き叫び、激しい自傷が始まってしまう。場合によってはこの時点でセラピーの適応ではないと即断されるだろう。しかしシナソンは自らの判断の甘さを反省しながらも、次の回からはテレサにドアの外に待機するよう依頼し、マウリーンが落ち着かなくなった時に入室してもらうという対応をして、セラピーを続けていく。

ここに示されているのは、重度・最重度の障害があるクライエントとの安定したセラピーの枠組みを作り、維持するためには、クライエントの日常生活を支えている家族や施設スタッフとの協力体制を作り、クライエントとその人々との関係性を知ること、さらにセラピストがそこに加わることによって生じる感情の複雑な交錯を読み取っていくことが不可欠であるという、現実的で柔軟な臨床的判断である。

2）セラピールームのおもちゃ

シナソンは、クライエントの年齢にかかわらず、おもちゃが使えるセラピールームを用意している。障害のある成人にとっては、おもちゃがあるのは不愉快なのではないか？という同僚の意見に対して、シナソンは*「大人も子どもと同様に、意味があると思うものは何でも手にとって使う」*という考え方を示しているが、「意味があるものは何でも使う」のはまさにシナソン自身の姿勢でもあるように思われる。

特に興味深いのは、知的障害のあるクライエントにとってのオルゴールの意味をシナソンが非常に重視していることである。先に挙げた、マウリーンが泣き叫んで自傷が始まっ

てしまった場面では、シナソンは他になすすべなく、オルゴール時計の音楽を鳴らす。するとマウリーンは泣きやみ、*「時計がほしいと手話で示した。そしてそれを耳にあて、胸に寄せ、キスをした」*。涙を流すマウリーンに*<私があなたのねじを巻いて音を出せればいいのにと思っているのね>*とシナソンは言う。マウリーンはオルゴールの音楽がゆっくりになるたびにねじを巻きなおし、*「音楽がゆっくりになる瞬間に耳をすませていた」*。シナソンはクライエントのオルゴールの音楽が遅くなることへの反応を、クライエントの自らの知的発達の遅れに対する大きく深い問いと重ねて理解する。*「私が悪くなったのはどこからだろうか、何が私をゆっくりにさせたのか、と、マウリーンはおそらく思っていた」*。

3　自分の内側のあらゆるものを使う

1）五感を使った観察

シナソンの観察力は驚異的である。最も印象深いのは、マウリーンとの出会いの場面である。シナソンはマウリーンを見て衝撃を受ける。車いすに座ったマウリーンは、*「ねじれた指で目を覆い、豊かな黒髪が生きていることの唯一の健康な証に見え」*、*「背中は曲がり、ぶかぶかのTシャツワンピースの首もとから片方の胸がはだけていて、動かせない脚はマッチ棒のように細」*いという姿だった。シナソンはそのように観察しながら、自らが受けた衝撃に気づき、さらに、マウリーンがそのことに、つまり自分の姿を見てセラピストが衝撃を受けたことに気づいた、と気づく。そして一瞬*「そのマウリーンの気づきをなかったことにしたいという、愚かで臆病な願い」*を抱いた自分にも気づき、冷静に知性をはたらかせる。そして今ここでの場面のように初対面の人が衝撃を受けるのを見たくないからこそ、マウリーンは手で目を覆っているのだという理解を伝えると、マウリーンは手を下ろしてシナソンと目を合わせ、シナソンはマウリーンが*「高いレベルの情緒的知性を持っていること」*を知る…という場面である。おそらく実際にはほんの数秒の出来事だろう。その間に、クライエントの細部までの観察、自らに生じた反応（衝撃）の自己観察、その反応が相手に与えた影響、それを否認したくなるという次の自分の反応をしっかりと見て、それらすべてをふまえての相手の行為（手で目を覆う）の理解につなげている。

2）身体的共鳴

つまり、シナソンは五感を使って相手のからだをありのまま観察し、自分自身の内面で生じる反応をありのまま知覚し、否定せず、活用している。シナソン自身はこれを「直感的な応答」と呼んでいるが、本人にとってはさほど強調したい点ではないようで、乳幼児観察などのトレーニングが重要だということ以外にはあまり詳しい解説をしていない。

しかし、このような「直感的な応答」は、トレーニングさえすればいつでもすぐにできることではなく、自分の心だけでなく自分の身体にも開かれ、クライエントの身体と共鳴させることが必要である。セッション3では、身体感覚が共有されるような自他融合的なレベルでマウリーンを感じ取っている。コーヒーを飲むマウリーンを見守りながら、一口

飲んだコーヒーの温かさがマウリーンの身体に染み渡るのを、シナソンは自分の体感として感じとる。同じセッションで、マウリーンはコーヒーをあまりに早く飲もうとしすぎて、喉元から服まで汚してしまう。*「べとべとして不快なよう」*だと感じ、ティッシュがほしいかとマウリーンに尋ねるが、反応はない。そのことからシナソンは*「そのべとべととした汚れを拭き取りたいのは私であると気づいた。彼女自身は不快を感じていなかった。それを私に負わせてしまっていたからだ」*と理解する。つまり、マウリーンの身体に生じた「温かさ」「べとべとして不快」という身体感覚を、あたかも自分の身体で生じたことのように感じ取り、それを表現し（ティッシュがほしいかと尋ねる）、それへの反応（不快を感じていない）によって、マウリーンへの理解を修正する（私に負わせてしまっている）というプロセスを、おそらくこれもごく短い時間のあいだに辿っている。

3）詩作

このような鋭く豊かな身体感覚を使うセッションは、莫大な心的エネルギーを消耗し、時に即座に言語化できないほどの強烈な情緒的体験となるだろう。プロの詩人でもあるシナソンは、クライエントの困難に圧倒されるような、すぐに記録を書くことができないほど重くつらいセッションの後に、詩を書くことがある（たとえば第4・5章）。そうすることで、*「経験していたいくつかの感情をつなぎあわせ、それによってセッションのことを思い出すことができるようになった」*と述べている。

つまり、シナソンにとって、からだとことばをつなぐのが詩作であり、臨床をするためになくてはならないものだ。マウリーンの事例は、100回を超えるセッションを経た後、キーワーカーの退職をきっかけに爆発したマウリーンの激しい自傷による思いがけない死によって終わる。その死の衝撃の中でシナソンは70行にわたる詩を書き、第9章を終えている。そうすることでやっと、衝撃を受け止め表現することができたのだろう。

訳者としては、詩の訳出はとても悩ましい。また読者としても、欧米の文献における詩の引用の意図が読み取れず難儀した経験があるのは筆者だけではないだろう。しかし、シナソンの臨床の一環としての詩作からは、アートの本来の機能、つまりからだとことばをつなぐという独自の意義がくっきりと伝わる。アートを媒介させることで、セラピストの感覚、感情、イメージ、認知の各機能がつながり、からだでの体験が、ケース記録という「ことば」、さらには事例研究という「ことば」に結晶するのである。

4　他書から知る「ことばのないところ」へのアプローチ

シナソンは1998年に「解離研究クリニック」を設立し、知的障害領域からトラウマや解離のテーマへと軸足を移した。本格的に解離の臨床および研究に携わるきっかけとなったのは、一人の知的障害のある女性クライエントとの出会いだった[4)]。それが本書でも何度か触れられている儀式虐待の研究およびアドボカシー活動というもう一つのライフワークにつながっていった。社会が目を背けてきたこのテーマに取り組み始めた時には様々な批

判を受けたが、シナソンはそれらと戦いながら活動を続け、社会からの認知を得るに至った。これは知的障害の心理療法を確立していった時と同様のプロセスだったという[4)]。

その後シナソンは、スーパーヴィジョンや短期のアセスメントセッションを除き、臨床活動から2017年に引退している[9)]。知的障害の心理療法は、シナソンの同僚や研修生だった臨床家たちがdisability therapyとして引き継いでいる。彼らが編んだ、いわばシナソンの引退記念論集からは、本書を刊行した後のシナソンの歩みの一部を知ることができる。

たとえばガルトン[6)]は、これまでにシナソンが指摘した、知的障害のあるクライエントを担当するセラピストにとっての重要な課題を以下のように整理している。

・自分には障害がないという罪悪感やクライエントの言っていることがわからないという恐れと折り合いをつける
・達成できることの限界を受け入れる
・クライエントにはセラピストの姿が見えていることが必要なのでカウチは使えないといったように、技法を変える必要がある
・気持ちを込めた話し方をする
・ネガティブな転移解釈にはそれを受け止めやすいようなトーンの声で話す
・はっきりと教育的なコメントが求められる場合もある
・より大きなケアと治療チームの一員になる準備をしておく
・性的虐待の可能性を受け入れることができなければならない

そして、最も難しい点として挙げられているのが、

・セラピストがクライエントの非常に強い投影に耐え、解釈する必要がある

という課題である。

ここには、伝統的な精神分析を基盤としつつ、柔軟に必要なものを取り入れていく姿勢がにじみ出ている。シナソン自身が「エスペラント」と表現しているとおりである。また、知的障害の心理療法を始めた初期を振り返り、その頃はいかに「これまでとは違ったやり方で」セラピーを行うかを議論していたが、今ではその根本である、温かく、関心をもち、共感的な態度が、障害の有無にかかわらず全てのセラピーに最適なものだと考えている、と語っている[4)]。ここには現代の心理療法全般で、「中立性」というものが「冷たく、情緒的に無反応であること」だと誤解されてしまっている状況への批判も含まれている。

ここまで見てきたように、シナソンはあらゆるものをクライエントのためにフル活用する。目立って見事な解釈の、「ことば」という方法は、目に見えにくいが周囲の環境すべてと自分の全身を使ったさまざまな方法の統合の結果であることが理解できる。

（山田美穂）

V　おわりに

2020年10月に、最新作である一般書が出版された。タイトルを日本語に直訳すると『トラウマと解離の真実：あなたが知りたくなかった、訊くのが怖かったすべてのこと』となる。コロナ禍が人の心に及ぼす影響にも触れながら、トラウマと解離に関する真実をわか

りやすく、かつその過酷さをごまかすことなく解説している[10)]。このタイトルが示すように、シナソンは読み手に「あなたはどうするの？つらいから見ないふりをするの？それでいいの？」という問いを突き付けてくる。それは知的障害のあるクライエントや解離に苦しむクライエントからシナソンが突き付けられ、全身で受け止め、社会に訴えてきた問いなのだろう。この問いを引き受けようとする中で、筆者らは心理臨床家としての各々のトラウマをみつめる格闘を始めることになった。その作業は痛みを伴い、トラウマのもたらす人と人を引き裂き分断する暴力に屈しそうになり、トラウマを見ないように再びハンディキャップでフタをしてしまいたくもなった。その検討は別稿に譲るが、筆者らはこれからも、ともに痛みをわかちあって対話をつむぎながらこの作業を続けたいと考えている。この本を手に取り、その対話に加わってくれる仲間が増えることを心から願っている。

引用文献

1）Alvarez, A. (2012). The thinking heart: three levels of psychoanalytic therapy with disturbed children. Routledge. 脇谷順子(監訳) . (2017). 子どものこころの生きた理解に向けて―発達障害・被虐待児との心理療法の３つのレベル. 金剛出版.

2）Bick, E. (1968). The experience of the skin in early object-relations. In Melanie Klein Today. Vol. 1. (1988). Routledge, London. 松木邦裕(監訳) . (1993). 早期対象関係における皮膚の体験. メラニークラインントゥデイ② . 岩崎学術出版社.

3）Bion, W. R. (1967) . A theory of thinking, in Second thoughts. New York, Jason Aronson. 松木邦裕(監訳) . (2007). 再考：精神病の精神分析論. 金剛出版.

4）Corbett, A. (2018) . An interview with Valerie Sinason reflecting on her life and the evolution of disability psychotherapy. In Corbett, A. (Ed.) . Intellectual disability and psychotherapy: The theories, practice and influence of Valerie Sinason. New York: Routledge. (Kindle Edition) .

5）藤山直樹 (2015) . 講義Ⅰ 精神分析の方法と本質を語る　もちこたえること.　松木邦裕・藤山直樹 (編) . 精神分析の方法と本質を語る. 創元社. pp. 39-42.

6）Galton, G. (2018) . Including the excluded: Valerie Sinason, psychoanalytic pioneer. In Corbett, A. (Ed.) . Intellectual disability and psychotherapy: The theories, practice and influence of Valerie Sinason. New York: Routledge. (Kindle Edition) .

7）桜井厚 (2002) . ライフストーリーの時間と空間. 社会学評論, 60 (4) , 481-499.

8）櫻井未央(2020). 語りのネガティビティに耐え、眺め続けること. 質的心理学フォーラム, 12, 79-82.

9）Sinason, V. (2020a) . Dr. Valerie Sinason. Home. https://valeriesinason. co. uk/

10）Sinason, V. (2020b) . The truth about trauma and dissociation: Everything you didn't want to know and were afraid to ask. London: Confer Books. (Kindle Edition) .